
僕と先輩とタバコ

鋼野タケシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と先輩とタバコ

【Nコード】

N6399K

【作者名】

鋼野タケシ

【あらすじ】

大学二年の春。僕は近所の喫茶店でアルバイトをしていた。遊ぶお金も欲しかったけれど、それ以上に時間を潰すためでもあった。無趣味で友達もいない僕は、家にいても退屈で仕方がなかったんだ。僕はそこで一人の女性と知り合った。

【僕と先輩とタバコ】

大学二年の春。僕は近所の喫茶店でアルバイトをしていた。遊ぶお金も欲しかったけれど、それ以上に時間を潰すためでもあった。無趣味で友達もいない僕は、家にいても退屈で仕方がなかったんだ。僕はそこで一人の女性と知り合った。切れ長の瞳に鼻筋はすっと通っていて、薄化粧がとても似合っている。長い黒髪を腰まで伸ばしていて、とても綺麗な女性だった。僕より二つ年上で、何かの夢を追ってフリーターをしているらしい。結局、詳しいことは教えて貰えなかったけど。

「わたし、海野サチ。アナタは？」

「斉藤幸雄、です」

休憩時間中、彼女は僕に話しかけて来た。海野サチだなんて、変な名前だ。親は何も思わなかったのだろうか。

「ねえ、変な名前だと思った？」

心の中を見透かされたようで、ドキリとした。僕は慌てて首を振った。

「いや、全然そんなことは……」

「うそ。わたしが名乗るとみんな笑うもの。面接の時なんて大変。ここの店長なんて本人目の前にして爆笑してんの。失礼だってーの。ま、おかげで即採用されたけどね」

海野先輩はケラケラと笑って、懷からタバコの箱を取り出した。ピンク色の可愛いパッケージだ。彼女は箱から一本だけ取り出して、僕にタバコを差し出す。

「吸う？」

「結構です」

「あらそう」

先輩はタバコをくわえてライターを探し始めた。お尻のポケットから使い捨てライターを取り出すと、ポツとタバコに火を付ける。煙を十分に吸い込んでから、ふうと吐き出した。それから僕に向き直ってこう言った。

「あ、ゴメン。タバコ吸って平気？」

「大丈夫ですよ」

っていうか、吸い出す前に聞けよ。そう思ったけど、僕はそれ以上何も言わなかった。自分の思っていることを正直に言えない初心者なんだ。それも相手は女性。恥ずかしい話だけど、僕は今まで女性と付き合ったことがない。当然、女友達なんていないし、母と妹以外は目も見て話せない。

タバコを吸う海野先輩を見ずに、僕は携帯をイジって休憩時間を潰していた。沈黙に耐えられないから、何かしてないと落ち着かなかったんだ。

「ねえ、斉藤くん」

「はい？」

呼び掛けられて僕は振り向いた。すぐ目の前に海野先輩の顔がある。心臓の鼓動が瞬間的に高まった。彼女はニンマリと笑うと、煙を僕に向かって吐き出した。突然の攻撃にむせ返る僕を見て、彼女はケラケラと笑っている。

「ちよつと！ 何するんですか！」

小心者の僕だけど、この時ばかりは流石に怒った。それなのに先輩は、涙を浮かべるほどに大笑いしていた。

「ごめんごめん、ちよつとイタズラしてみたい気分で」

そんな気分に付き合わされるコツチはたまったものじゃない。

「サっちゃん！ アナタまだ休憩時間じゃないでしょ！ サボらない！」

「やっぱ、店長だ。はいすぐ戻ります！」

カウンターから怒鳴り声が聞こえてきて、海野先輩は慌ててタバコを灰皿に押し付けて消した。

とにかく不真面目でイタズラ好きで、とんでもない先輩だった。普通の店だったらすぐにクビにされていたと思う。店長は彼女を気に入っているし、裏表のない先輩はバイト仲間からも好かれていた。誤解の無いように言わせてもらっけれど、僕は彼女が嫌いだった。人見知りで女性に免疫のない僕は、歯に衣着せぬ言い方をするよ。うな女性に苦手なんだ。

そんな僕の気持ちなんて知りもせずに、彼女は平気で僕に接して来る。仕事中はよくからまれたし、休みの日まで呼び出されて、買い物に付き合わされるなんてしょっちゅうだ。

「ねえユキオ。アンタ今日休みでしょ？ 駅で待ってるから。十時ね」

こんな調子で突然呼び出されるのだ。こっちの都合なんて構いもしない。

「先輩、買い物に付き合ってくれる友達いないんですか」

「いないよ、ユキオ以外。いーじゃんアンタだって友達いないんだし。女と買い物行く機会なんてないでしょ？」

こちらが気にしていることを平気で言ってくる。僕がムスツとして黙り込むと、彼女はケラケラ笑いながら心のこもらない謝罪をする。

自己中心的で、わがままで、こっちのことなんて少しも考えられない。相手の心に土足で踏み込んでくる、デリカシーの力ケラもない女性。それが彼女だ。

もう一度言うけれど、僕は彼女が嫌いだった。

だから彼女が結婚するなんて知っても、別段思うところはない。なかった。

「ご無沙汰してます、店長」

「あらユキオくん！ 久々じゃない、どうしたの？」

鈴木店長のオネエ言葉も懐かしく感じる。大学を卒業して、今年

で三年になる。僕は地元を離れて、東京で一人暮らしをしていた。
「いやあ、久しぶりに実家に戻ってきたので、店長に会いたくなっちゃって」

「まあ嬉しいこと言ってくれちゃって」

店の様子は当時と何も変わっていない。まるであの頃から、時間が進んでいないみたいだ。小奇麗に整頓された食器棚と、シミ一つない床。白いテーブルもピカピカに磨き上げられている。

「お客さんが全然入らないから、掃除くらいしかすることないのよ」
当時、店長はそう話していた。今も変わらない店内を見て、妙に懐かしい気分になった。

注文したコーヒーを一口飲む。それも当時と変わらない不味さで、僕は少しだけ嬉しくなった。

「ねえ聞いたユキオくん。サっちゃん今度、結婚するらしいわよ」
動揺を隠すのにかなりの努力が必要だった。平静を装うために、僕はもう一口、コーヒーを飲んだ。

「初耳です。海野先輩が結婚ですか」

「ええ。私ビックリしちゃって。サっちゃん良い子だけど、良い奥さんになれるかしらねえ」

店長はこちらの様子に気付いていないようで、話を続けていた。

「それにしても偶然ねー。サっちゃんも昨日、うちの店に来たのよ」

「え？ 日本に戻って来てるんですか？」

僕が大学を卒業する一年前、「わたし、フランスに渡米するんだ」とワケのわからないことを言い出して、彼女は店を辞めてしまった。どうやら海外を飛び回っているらしく、時々差出人不明の絵葉書が届く。外国に知り合いなんて一人もないから、間違いなく先輩からだ。だから元気でいることは知っていた。

結婚を告げる手紙が届いたのは一ヶ月前。写真には日に焼けた彼女が、エアースロツクの前に一人で立っていた。

『海野サチです。元気？　ところで今度、結婚します』

手紙と言うにはあまりにも短すぎる文章。最初は何かの冗談かと

思った。だけど、そんなことで僕を騙して何になる？ その手紙を読んで以来、仕事に手が付かなくなった。

だから無理矢理に有休を取って、地元に戻ってきた。店長と先輩は当時から親しく、店を辞めた後も付き合いがあった。だから結婚のことも何か知っているかも知れない。そう思ったんだ。

「結婚式は日本で挙げるんですって。相手の男性はガイジンさんだったわよ。すごいイケメンなの。ほら、あれよ、海賊の映画に出てくる俳優にそっくり！ 名前もおんなじなの！」

「オーランド？ ジョニー？」

「そう、それ！ ジョニーよ！」

どうやら、結婚は本当の話みたいだ。それもそうだろう。結婚するなんてウソを僕に吐いても仕方がないのだから。

「サっちゃん、実家に帰ってるらしいわよ。会いに行ったら喜ぶんじゃないかしら？」

僕は当時から、彼女のことを嫌いだった。だから結婚をするなんて聞いても何も思わないし、それが本当の話だとしても、僕には関係がないことだ。

「そうですね。挨拶くらい……していいかな」

不味いコーヒーを飲み干した。今度は何の味も感じなかった。

「もう帰るのかい？ もっとゆっくりしていけばいいのに」

「悪いね母さん。有休、今日で終わりなんだ。次は正月にでも帰るから」

僕はそれ以上この街に留まりたくなくて、両親にウソを吐いた。有休はあと三日ほど残っている。それでも僕は、すぐに東京に戻ることに決めた。別に深い理由があるわけじゃない。ただゆっくりしているのにも飽きたし、家に戻って掃除でもしようと思ったただけだ。カバンの中に荷物をまとめて、駅に向かって歩き出す。本来ならこの時間は、取引先に電話でも掛けている頃だろう。それをのんび

り歩いていられるなんて、少しだけ嬉しかった。嬉しいはずなのに、心が妙に沈んでいた。

「あれ……ユキオ？」

もし神様がいるとしたら、きっとそいつは意地が悪いに決まっている。どうしてこんな偶然を引き起こすんだろう。

聞こえて来た声に振り返ると、そこには海野サチ先輩が立っていた。

「久しぶりね！ 元気だった？」

彼女は満面の笑顔で僕に近付いて来る。肌は日に焼けて髪も少しだけ短くなっている。それでも彼女は変わらずに綺麗だった。

「元気そうで何よりです。少し太りました？」

「久々に会って言うことがそれか？」

バシンと、僕の背中を力いっぱい叩く。僕が痛がると、彼女はケラケラと笑った。中身は全然変わっていない。性格も笑い方も、この笑顔も。何もかもあの頃の先輩だった。

彼女の横には、堀の深い顔をした外国人男性が立っていた。恐らく彼が例のジョニーだろう。なるほど、確かにそっくりだ。

先輩は流暢な英語でジョニーに話す。ジョニーは納得がいったように頷き、僕に向かって右手を差し出す。握手しろってことだろうか。

「え、えーと。ナイス、チュー、ミーチュウ」

高校以来、一度も使われることのなかった英語力を發揮して、僕は片言の挨拶を交わす。ジョニーは悪戯っぽくニコリと笑った。

「アナタのことはサチから聞いてます。わたしはジョニー・コリンズ。よろしく、ユキオ」

外国人とは思えないほど、上手な日本語だった。多分、僕が英語で話し掛けるまで黙っているつもりだったのだろう。どこことなく、性格が海野先輩に似ていると思った。

「ジョニー。ちょっと二人で話してもいい？」

「ああ構わないよ。ユキオがサチを連れて逃げ出さないのであれば

ね」

ハハハと笑って、ジョニーは僕にウィンクした。

「先に戻っているよ。お義父さんと将棋でも打ってる」

ジョニーが去った後、駅前には僕と海野先輩だけが残されていた。暖かい風が吹いている。もう雪の名残はすっかり消えて、穏やかな春が訪れていた。

「手紙、受け取ったでしょ？ わたし、今度結婚するんだ」

「おめでとうございます」

僕は心から祝福するつもりでそう言った。そう聞こえて欲しいと願った。

「うん。ありがとう」

彼女は素直に頷いた。僕はどんな表情をしていたのだろうか？ 多分、自分で思っているような笑顔は浮かべられていないと思う。

それから僕らは、他愛も無い話をした。

大学を卒業して就職したこと、今は東京で一人暮らしをしていること、今日は有休を使って戻ってきたこと。

この街に戻ってきた理由は話さなかった。彼女も聞こうとはしなかった。

先輩は色々な国を旅して来たらしい。日本に戻って来たのはつい最近のことで、式を挙げたらすぐにまた海外へ戻るそうだった。

ジョニーとの出会いや彼とのことは、先輩は何も話さなかった。だから僕も聞こうとはしなかった。

一時間以上もそこに居ただろうか？ やがて僕らは話すこともなくなり、お互いに黙り込んだ。

先輩は懷からタバコの箱を取り出した。昔と変わらない、ピンク色の可愛いパッケージ。一本口にくわえると、先輩はタバコの箱を僕に差し出した。

「吸う？」

「結構です」

「あらそう」

お尻のポケットから使い捨てライターを取り出すと、ポツとタバコに火を付ける。煙を十分に吸い込んでから、ふうと吐き出した。僕は何を言うでもなく、街の風景を眺めていた。黙って立っているだけなのに、気分が安らいだ。

ずっとこうしていられたらいいのに。僕は心からそう願っていた。

「ユキオ」

「はい？」

呼び掛けられて僕は振り向いた。すぐ目の前に海野先輩の顔がある。心臓の鼓動が瞬間的に高まった。彼女は真顔のまま僕の首に手を回して、唇を重ねた。タバコの匂いとシャンプーの香りが混ざり合って、僕の嗅覚をくすぐった。

「……これ、浮気になるのかな」

先輩はニンマリと笑った。その目が少しだけ潤んでいることに、僕は気付かないフリをした。

「当然でしょう、そんなの」

僕は不機嫌そうに答えた。彼女はケラケラと笑っていた。それからもう一度タバコを口にくわえて、ゆっくりと煙を吐き出す。携帯灰皿を取り出すと、短くなったタバコを放り込んだ。

「それじゃ……そろそろ帰ろうかな」

名残惜しそうに先輩は言う。僕は予感していた。多分、先輩も同じだと思う。僕らがこの先会うことは一生ないだろう。

僕は何も言えなかった。今さら、何を言えればいい？

「さよなら、先輩」

「ばいばい、ユキオ」

僕らはそう言ってお別れをした。それから、先輩には一度も会っていない。結婚式も僕は出なかった。

何度でも言うけれど、僕は先輩を嫌いだっただ。けど……少しだけ素直になれていたなら、違う結末が見れたんじゃないかな。そう思うこともある。

あれからもう、何年経っただろうか。今でもタバコの匂いを嗅ぐ

と、僕は先輩を思い出す。

（後書き）

部屋とYシャツと私。深い意味はありません。

ところで、ハッピーエンド以外は好きじゃないんです。いきなり自分で書いたもの否定するようですが。

だから物語を考える時には、なるべくハッピーエンドになるように考えます。

ご都合主義でも無理矢理でも、せつかく物語なんですから、幸せな結末が良いです。

この作品は思いつくままに指を動かしたら、こういった終わり方になりました。

心の中からこういう物語が生まれるってコトは、きっと何か意味があるんでしょうね、自分の中で。

とりあえずコレは完成形として、投稿します。
また同じテーマで別作品も書いてみようっと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6399k/>

僕と先輩とタバコ

2010年10月8日15時47分発行